

NewsLetter

Japanese Association on Sarcopenia and Frailty

日本サルコペニア・フレイル学会

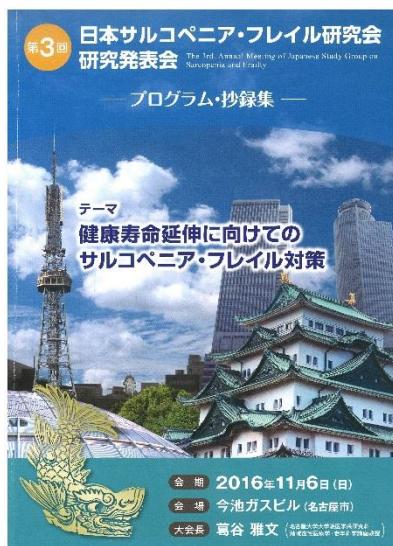
(旧 日本サルコペニア・フレイル研究会)

第5号 2016.12

第3回日本サルコペニア・フレイル研究会 研究発表会を開催して



当番世話人
名古屋大学大学院医学系研究科
地域在宅医療学・老年科学
名古屋大学未来社会創造機構
葛谷雅文



第3回日本サルコペニア・フレイル研究会が11月6日に名古屋の今池ガスビルで開催されました。今回のテーマは「健康長寿延伸に向けてのサルコペニア・フレイル対策」とし、国立長寿医療研究センター理事長、鳥羽研二先生による基調講演（「フレイルのイベントとしての転倒」）、二つのスポンサードシンポジウム（「超高齢社会における転倒・骨折の予防戦略」「臨床応用できるフレイル・サルコ評価指標について」）、ワークショップ（「サルコペニア関連骨格筋の全て」）ならびに9題の優秀演題（口演）と66題のポスター、3つのランチョンセミナーが開催され、



多くの参加者にお集まりいただきました。また優秀演題の中からお一人、熊本大学薬学部の渡邊博志先生（「慢性腎臓病が誘発する骨格筋萎縮における尿素毒の関与とその分子機構」）が最優秀演題賞を受賞されました。今回は前日、前々日に第二回ア

ジア・フレイル・サルコペニア学会に続けての開催で、3日間継続して参加していただいた参加者の方々も多くおられました。発表内容も充実し、毎年、この分野の関心が高まっていくのが肌で感じられました。

また、今回の研究会終了後、本研究会が学会に移行することとなりました。そのため次回の第4回発表会は日本サルコペニア・フレイル学会大会としてさらに充実した会になることを期待いたします。



第2回アジアフレイル・サルコペニア学会 (2nd ACFS)に参加して

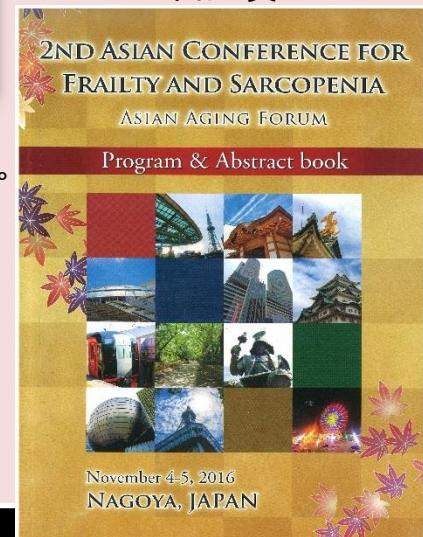
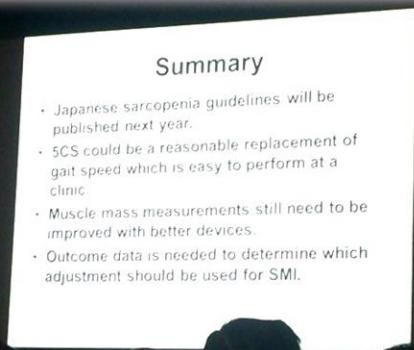
2016年11月4-5日、名古屋で第2回アジアフレイル・サルコペニア学会（2nd Asian Conference for Frailty and Sarcopenia）が開催されました。本学術集会は、国立長寿医療研究センターの荒井秀典先生が大会長を務められ、日本では初めての開催となりました。この学術集会では、基礎的な内容から臨床的な内容まで幅広い範囲で、サルコペニア・フレイルに限定した内容について討論を行うため、本領域の研究者にとっては大変有意義な時間を過ごすことが出来ます。実際、University of GenevaのJean-Pierre Michel先生による基調講演の他、12のシンポジウムと3つのランチョンセミナー、



筑波大学大学院
人間総合科学研究科生涯発達
山田 実

それにポスター発表という充実した内容で、サルコペニア・フレイルに関する基礎的情報を整理し、最新情報を得ることが出来ました。私は、桜美林大学・国立長寿医療研究センターの鈴木隆雄先生、Ajou University Medical CenterのYunhwan Lee先生が司会の労をとられたCommunity Intervention for frailtyのシンポジウムで発表の機会を頂くとともに、ポスターでの発表機会も得ることが出来ました。国内開催の学術集会ではあるものの、国際学会で得られる情報や刺激は多く、発表者としても大変勉強になる2日間でした。

次回の第3回アジアフレイル・サルコペニア学会は韓国にて開催されます。今から楽しみにしています。



日本サルコペニア・フレイル研究会は一般社団法人 日本サルコペニア・フレイル学会になりました



日本サルコペニア・フレイル学会
代表理事
国立長寿医療研究センター
副院長
荒井 秀典

本学会の前身である日本サルコペニア・フレイル研究会は、平成26年に設立され、同年10月より研究会を開催し、サルコペニア、フレイルに関して研究の交流、情報発信を行って参りました。その間、経済財政諮問会議などにおいてフレイル予防の重要性が強調されており、まさに時代の要請に合致した研究会として発展してきました。本年には第3回目の研究発表会を行うとともに、第2回目のアジアフレイルサルコペニア学会を名古屋で開催し、本研究会の存在を世界的にアピールすることができました。第3回目の研究会においてはその参加者が500名を超え、ますます本領域の研究者を集めた研究会として年々参加者が増加しています。研究会の設立から2年半を経過し、さらに我々の活動を充実したものとし、国民の健康長寿に寄与するため、平成28年9月に一般社団法人となりました。引き続き皆様の温かいご支援をお願いするとともに、会員一丸となって、サルコペニア、フレイルの概念、予防、介入につき研究を行うとともに情報発信をしていく所存ですので、よろしくお願いたします。

9th Cachexia Conference に参加して

2016年12月10,11日に開催された9th Conference on Cachexia, Sarcopenia & Muscle Wasting (ドイツ・ベルリン) に参加してきました。オーラルと、一般演題のポスターにわかれ、ポスターセッション全123演題のうち、日本からは私を含め9演題のエントリーがあり、いずれも興味深い内容でした。先日のノーベル賞受賞により世間でもオートファジーが注目を浴びていますが、ミトコンドリア機能に関する内容も目立ち、表面的な治療だけではない悪液質・サルコペニアに対するアプローチを考えさせられました。臨床系の内容として、欧州の地の利を活かした多国間多施設ランダム比較試験が複数進行中であり、日本国内では実現困難な研究内容や規模の大きさに、サルコペニアや悪液質に対する認識自体そのものを含め、日本と欧米との間の差を痛感させられました。ただし、平均BMI25kg/m²以上の母集団である研究が多数であり、またstudyの内容とリアルワールドの解離を感じる内容もあり、結果を本邦で用いる場合には内容を慎重に評価・確認することが望まれます。普段は臨床業務に多くの時間を費やす生活ですが、日常臨床で如何に多くの疑問を感じ、リアルワールドとしてRCTで仮説を証明していくことが、日本から世界にimpactを与える近道であると強く再認識して帰国の途につきました。次回は2017年12月8-10日にイタリア・ローマで開催予定です。



聖マリアンナ医科大学
横浜市西部病院
循環器内科
鈴木 規雄



論文紹介



Shiraishi A, et al.
Prevalence of stroke-related sarcopenia and its association with poor oral status in post-acute stroke patients: implications for oral sarcopenia. Clin Nutr. 2016
doi: 10.1016/j.clnu.2016.12.002

回復期リハビリテーション病棟に入院した脳卒中患者202人を対象に、ROAG (改訂口腔アセスメントガイド) で評価した口腔状態と、AWGS基準の筋肉量と筋力で評価したサルコペニアの関連をみた論文です。男性107人、女性95人、平均年齢72歳で、ROAGでは82.2%に軽度から重度の口腔問題を認めました (中央値11点)。脳卒中によるサルコペニアの有病割合は53.5%でした。ROAG得点は、筋肉量および握力と独立した関連を認めました。回復期リハ病棟の脳卒中患者では、口腔問題とサルコペニアを認めることが多く関連を認めるため、オーラルサルコペニアの評価とモニタリングが重要です。オーラルフレイルという言葉はかなり普及しましたが、その原因の1つとしてオーラルサルコペニアというコンセプトが評価と対応に重要です。また、入院リハを要する脳卒中患者では、全身のサルコペニアの評価と対応も重要で、リハ栄養の考え方が有用だと思います。
(若林 秀隆)

第4回 日本サルコペニア フレイル学会大会

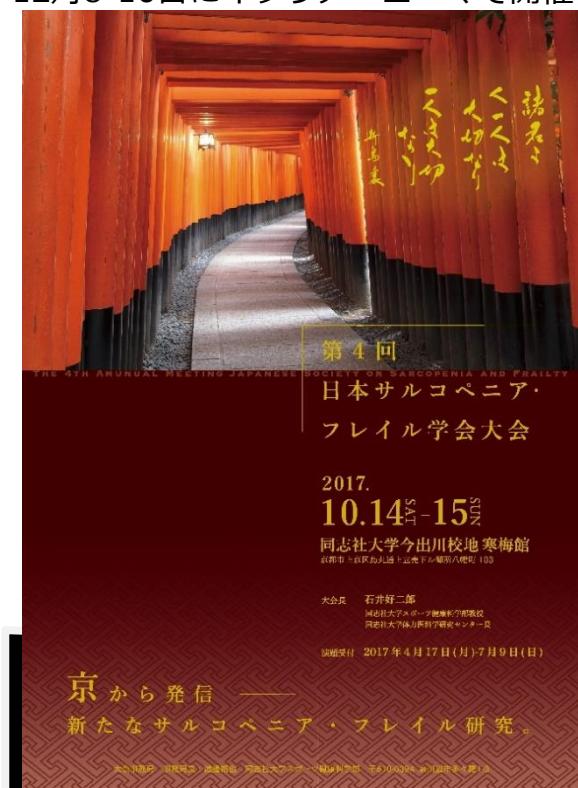
会期
2017年10月14, 15日

場所
京都 同志社大学

学会長
石井好二郎
同志社大学スポーツ健康科学部

関連学会2017

第32回日本静脈経腸栄養学会学術集会 2月23-24日 岡山
7th ICFSR2017 4月27-28日 スペイン バルセロナ
第59回 日本老年医学会学術集会 6月14-16日 名古屋
第54回 日本リハ医学会 6月8-10日 岡山
ESPEN Congress 2017 9月9-12日 オランダ ハーグ
第72回日本体力医学会大会 9月16-18日 松山
EUGMS Congress 2017 9月20-22日 フランス ニース
第7回日本リハ栄養学術集会 11月25日 仙台
10th Cachexia Conference 12月8-10日 イタリア ローマ



事務局: 日本サルコペニア・フレイル学会 事務局
〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1パレスサイドビル
(株)毎日学術フォーラム内 TEL: 03-6267-4550 FAX: 03-6267-4555

吉村芳弘 (編集)